

古典を読む ハリエット・ビーチャー・ストウ著『アンクル・トムの小屋』：毀誉褒貶の軌跡

楠本, 君恵 / KUSUMOTO, Kimie

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

75

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

227

(終了ページ / End Page)

238

(発行年 / Year)

2007-10-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003085>

【古典を読む】

ハリエット・ビーチャー・ストウ著『アンクル・トムの小屋』

— 毀誉褒貶の軌跡 —

楠 本 君 恵

この本ほどおおぜいの人に読まれ（発売当日から予想外の売れ行きを見せ、需要に追いつくために「8台の印刷機を昼夜通して運転し」増刷に当たったという）、人々に影響を与え、歴史を動かし、長い間読み継がれ、また、何よりも毀誉褒貶の激しい本はないだろう。日本ではかなり早く紹介され、詳しい解説付きの文庫本が昭和40年の初め相前後して出版されたが、長い間、完訳本は絶版になっていた。1998年9月に明石書店から小林憲二監訳で



刊行された。A 5判で632頁の大部である。（ちなみにPenguin Classics版で629頁、共に絶版になっているが、角川文庫版では上下合わせて818頁、旺文社文庫版では、838頁である。）ダイジェスト版は、児童書として書店の書架に途絶えたことがない。ダイジェスト版でも読まないよりは読んだ方がいいに決まっている。とはいえ、このくらいの本になると（すでに子供の時に読んだから」と、もう一度原本に当たろうとする人は少ないだろうと思うと残念だ。

奴隷も奴隷貿易も現在の私たちには遠い存在になっている。だが、ほんの150年程前まで、あの非人間的な制度がアメリカに厳然として存在していた事実——人間があのように残酷になれること、あの民主的な憲法を持った国で肯定されていたその制度に則って、人が理性も感情も麻痺させてかくも欲望をむき出しに生きられたこと、アメリカの根源的財がそうして蓄積されたこと等々——は知らなければならないことだと思う。

ストウ夫人と呼ばれている牧師の妻ハリエット・ピーチャー・ストウが書いたこの本を読むと、奴隷制度について何の知識がなくても、その非人間的な制度は悪だとひしひしと伝わってくる。そして、善良で自己犠牲をいとわないトムが過酷な運命に翻弄されてゆく姿にどうしようもない哀しさを味わう。特にダイジェスト版では、登場人物の内面描写や宗教観・政治観、筆者の作品に込めた意図などは、必要最小限にとどめられ、ストーリー展開に重きが置かれているため、感情のままに物語に没頭でき、その感動は大きい。そして、トムのような黒人を動産として所有し、売買し、酷使していた奴隷制度というものに強い怒りと嫌悪を覚える。

だが、ポジティブに評価されているトムのその同じ要素が、たちまち全くネガティブに評価され始めたのだ。この小説が奴隷制という社会問題を真っ向から取り上げている以上しかたがないことかも知れないが、この激しい落差を考えただけでも、これは実に希有な作品だといえる。それは、とりもなおさずアメリカにおける人種の対立がどんなに根深いものであるか、アメリカの黒人奴隷制がどんなに一筋縄でいかないやっかいなものであり、深い傷を残したかということであり、その堅固な壁を破ることになったストウ夫人のこの作品がいかにリアリティのある作品だったかということである。

ケンタッキー州の温情的な農園主シェルビーと優しい女主人の奴隷として、妻と3人の小さな子供と丸太小屋に住み、平穏な暮らしをしていたアンクル・トムは、主人の借金のかたに売られることになった。たまたま奴隷商人の目にとまった混血黒人奴隷イライザの幼い息子ハリーが「おまけ」

として要求された。イライザは息子と共に逃亡する。だが、トムは主人の苦境を理解し、「売られていくのがお前や子供たちではなくて良かった」と、妻クロウに慈悲深い言葉を残し、売られていく。深南部にいけば過酷な労働で何年も生きられないことも、二度と生きて家族に会うこともないだろうことも知っていた。



奴隷商人とオハイオ川を下る船に乗っていたトムは、舷側から川に落ちたエヴァという白人の少女を助けたことから、エヴァの父、農園主のセント・クレアに買い取られる。このエヴァとトムとの交流がこの物語の中で一つのクライマックスになっている。エヴァは子供ながらに完全なキリスト教徒として描かれ、トムを慰め、感じやすい心で世の悲惨さを嘆きながら、幼くして神の元に旅立つ。セント・クレアは、娘エヴァの頼みでトムを解放すると約束したが、その約束を果たす前に不慮の死を遂げてしまう。

トムは、再び売られて、残酷な奴隷所有者レグリーの奴隷となる。過酷な労働に耐えながらも、トムは同胞への愛を失わず、鞭を食らっても仲間苦境を和らげるために助けの手を差し出す。レグリーに囲われている女奴隷キャサリンから逃げるチャンスを与えられるが、逃げようとしめない。レグリーは、どんな仕打ちにも超然と耐えるトムが憎くてたまらない。他の奴隷を鞭打てという命令を拒んだことと、キャサリンらの逃亡を助けた罰で鞭打たれて瀕死状態になってさえも、トムはいう。「かわいそうな人です。あなたはもうわしに何もできない。心から許してあげましょう」トムは、トムを憎み今まさにトムの命を奪おうとする相手を許し哀れみながら、息を引き取る。

ストウ夫人はトムを彼女が理想とする最高のキリスト者として描いた。

敬虔なキリスト教徒であり、名の知れた牧師の娘であり、妻であり、姉である夫人は、真のキリスト教徒として何をなすべきかという教訓の書としてこの作品を書いた。トムは、人類の罪を贖うために十字架に架けられて死んでいったキリストの再来として描かれたとあってよい。夫人は、トムに慰めを与えた天使の化身のような少女エヴァの死にも同様の効果を持たせた。2千年前、キリストは同じように人類の罪を一身に背負いその贖いのために死んでいった。キリストの死が無駄でなかったとしたら、もし全キリスト教徒の百万分の一でもその贖罪の意味を理解していたら、この2千年間に世界はどんなに変わっていただろう。その実践の困難さを身をもって認識していただろうストウ夫人は、エヴァの死、トムの死が作中人物たちにどんな効果をあげたかを決して誇張して描いてはいない。

実際、キリスト教徒としての自覚のない同時代人への批判は随所に描かれている。例えば、23章の最後で、エヴァが従兄のヘンリーと交わす会話がある。奴隷少年ドドを平気で撲つヘンリーの態度に、エヴァが怒って、召使いを愛せないのか、聖書には全ての人を愛せと書いてあるのに、という、ヘンリーはこともなげにこういう。

「聖書には確かにそんなことが何か所も書いてあるさ。でも、誰もそんなことを実行しようとはしない。本当さ、誰もしないよ」

実際にトムの撲殺に手を貸した男たちは「改心した」とあるが、それを命じたレグリーは、感謝どころか改心もしなかった。エヴァの死も、心から哀悼の意を表したのは父親と奴隷たちで、南部の価値観に固まった母親には娘の贖罪の意味は伝わらなかった。

しかし、エヴァやトムの死は無駄ではなかった。人々の良心に訴える筆者の熱い筆は、幅広い読者の心を動かした。キリスト教徒として、南部人として、北部人として、ことを決する立場にある男として、夫を持つ妻として、子を持つ母として、自分のしなければならないのは何かと考えさせた。ことに子を持つ母としての苦悶は、キリスト教徒としての義務と同じくらい、いや、それ以上に説得力を持って描かれている。

奴隷の母親から生まれてくる子供は奴隷所有者にとっては新たに財として得られた動産である。どれほど多くの奴隷の母親が、生まれる端から我が子をもぎ取られ、売られてしまう悲しみに耐えなければならなかっただろう(陵辱されて孕んだ子供にせよ我が子の可愛さに代わりはない)。作中のある老女は、最後の子供に与える母乳が出なくなったとき、仕事の妨げになるからと女主人に赤ん坊を屋根裏に閉じこめるよう命じられ、赤ん坊を死なせてしまう。ひもじさに泣きながら死んでいった子の泣き声が耳から離れず、ついに主人の酒を盗んで酔っぱらうしかなくなり、狂って死んでいった。ある母親は、美しい娘と売りに出されたが、売られた後に娘を待っている運命に耐えられず、髪をばっさり切り落とし、顔を汚して男装させる。別の母親は一緒に売って欲しいという願いが叶えられず、赤ん坊を売り飛ばされ川に身を投げる。我が子殺しの神の罰を知りつつも、過失に見せかけて赤ん坊に消毒薬を飲ませて殺す母親…。ストウ夫人は、同じ母親として読者に、「皆さん、こんなことがあなたの身に起こったら耐えられますか」と再三再四問いかける。誰にもあるはずだと信じる良心、誰にも持って欲しいと期待するキリスト教徒としての慈悲心に、奴隷制度の非人間性を訴える。

人と、人の行動を考えると、私はいつも「心」と訳す二つの単語heartとmindを思い浮かべる。前者はfeelingを後者はintelligenceを司る。その中間にあり、両者を統合したのがconscience(良心)ではないかと思うが、たいていの場合、最終的に行動を決定するのはマインドだろう。だが、そのマインドを動かすのはハートである。例えばもし、ユダヤ人を「憎い」という感情が社会に浸透していなかったら、あのホローコーストの参事は起らなかったであろう。黒人奴隷制を敷くに当たって、「悪いことではないか」という心^{ハート}の痛みがあったからこそ、彼らは論理的にその感情を抑え込もうと必死で自分たちの行っていることを正当化する箇所を聖書の中に探したのではなかったか。

『アンクル・トムの小屋』は1851年6月から52年の4月にかけて『ナシ

ヨナル・イアラ』という奴隷制廃止論者たちの週刊機関誌に掲載された。たちまち評判になり、掲載が終わらないうちに出版された。1850年には、悪名高い「逃亡奴隷取締法」が制定され、南部の奴隷制は一層強化された。1793年の早くから、所有者が逃亡奴隷を取り戻し、その罪をいかなる残虐な手段によっても罰することができる権利が法律で認められていた。だが、それは奴隷州に限られていた。しかし、それに拍車をかけた1850年の法で、もはや北部の自由州さえも、逃亡奴隷には安全の地ではなくなった。ストウ夫人がこの作品を書かざるを得なくなったのは、ついに北部が妥協してしまったこの法の制定に我慢できなくなったからだった。作品の序で、この小説の目的は、この国にいるアフリカ人種の状態に同情と思いやりを喚起し、彼らを苦しめている不正な制度について考えてもらうことだと述べている。

キリスト教徒の良心に訴えるストウ夫人の筆が主な読者——中流階級の婦人たち——を動かした。(自由黒人の中にも購読できる人はいたかも知れないがとるに足りない数だったはずだ。)イライザが逃亡の途中でかくまわれたオハイオ州の「地下鉄道」(自由州やカナダへの逃亡奴隷の脱出を助けた秘密組織)の「駅」の一つバード家の夫と妻の描き方から、女性の良心が世界を変えろという筆者の信念が伝わってくる。夫の上院議員のバード氏が、新法決定に賛成票を投じたということを知ると、激しく夫を非難する。「恥を知るべきです、ジョン。かわいそうな、家庭もなく、住む家もない人々を。恥ずべき、邪悪な、忌まわしい法です。機会があれば、まず私がそんな法を犯します！」立場上そうしたものの、バード氏は心情的には妻と同じだった。そんな夫の迷いを乗り越えさせ密かにイライザ逃亡幫助の行動に移させたのは、妻の心からの説得が功を奏したからだった。バード夫人はそんな夫を讃える。「涙に濡れた輝く目で自分を見つめる小柄な妻がとても美しかったので、上院議員は、こんな愛らしい人にこんなに情熱的に敬われるなんて、自分は確かに賢い男なのだと思った。」(第9章) こういう記述が同様な状況の読者を動かさないわけがない。

フランスでいち早くジョルジュ・サンドが出版を推薦し、イギリスの女流作家ジョージ・エリオット、バイロン夫人等が共感を示したというのもうなずける。

しかも、母親の感動は子供に伝わる。ストウ夫人が考えていた以上に広く、この作品は子供を読者として獲得していった。母親が語ってくれる物語の進展を子供たちもいっしょに楽しんだ。頁数そのものは多くないが、確かにこの物語には、子供の読者が自己投影できる印象的な子供が描かれている。混血奴隷の母親イライザと逃亡するかわいいハリー、ケンタッキーのトムの最初の農園主シェルビーの息子でトムに文字を教えてくれたジョージ、野生児のような手に負えない、だが優しさのある黒人の少女トプシー、そしてエヴァ。子供たちは、彼らの運命を気にしながら、母親たちが熱心に読んでいる「アンクル・トム」の次号を待ち望んだのだろう。作者の元に毎週たくさんの手紙が寄せられたそうだ。

角川文庫の『アンクル・トムズ・ケビン』の訳者の一人、本学名誉教授の大久保博氏は、解説で、本として出版された際に省かれてしまった連載の最後に書き添えられた部分を紹介している。ストウ夫人は、「この物語をずっと聞いてくださったお小さい皆さん」と呼びかけて、「この物語から学んだことを忘れずに、かわいそうな、しいたげられた人びとに哀れみの心を実際に見せてあげて下さい」といっている。(下巻459-460頁) 同解説によると、1850年代のアメリカ南部の全奴隷の評価額は約25億ドルにのぼったという。ストウ夫人にしても、南部経済に与える影響を考え、奴隷制度の即時撤廃などということは考えていなかっただろう。本の序で、奴隷制を法的に処置するという当然解決しなければならない困難な問題に巻き込まれる人々に、決して私的な怨みを持っているわけではありません、と断っている。この難しい問題の平和的解決は未来を担う子供たちに委ねるしかないと思っていたのかもしれない。

だが、その反響はあまりにも大きく急激に高まってしまった。作品は読者の心をつかみ、世論を形作るのに貢献し、南北戦争を引き起こす一助と

なり、めまぐるしく世の中を動かし、最終的にリンカーンに奴隷解放を宣言させてしまった。このこと自体が著者には信じられないことだっただろうが、更に信じられないことが起こった。

殉教者アンクル・トムが、時代の移りと共に黒人たちの唾棄すべき人物の代名詞となったのだ。解放後、黒人の社会的地位がごくわずかながらも向上していくにつれ、この本を読み理解しようという黒人がでてきた。他方で、相変わらず彼らを二級市民にとどめておこうとする白人たちの慰めにアンクル・トムを揶揄した低俗な芝居がはやった。トムを演じるのは、顔に墨を塗った白人だった。(黒人大衆に「アンクル・トム」が知れ渡ったのは、この宣伝ビラとか、戯画の影響が軽視できないのではないかと思う。)

これは、知的な黒人たちには我慢のならないことだった。1930年代後半から活躍した黒人作家リチャード・ライトは、最初の短編集に『アンクル・トムの子供たち』というタイトルをつけた。そして、30年代の黒人、つまり「アンクル・トムの子供たち」の現状はこうだ、と南部社会の不正に対して激しく抗議の声を発する黒人たちを描いた。物語の前にこんなエピソードがある。

「あいつはアンクル・トムだ！」という言葉は、白人の前では身のほどをわきまえて、ぺこぺこしながら、じっと辛抱している卑屈な黒人のことだったが、南北戦争以降、黒人たちの間で頻繁に聞かれたその言葉は、別の世代から生まれた新しい言葉に取って代わられた。曰く、「アンクル・トムは死んだ！」

解放から100年経った1960年代に沸騰した黒人の公民権運動の指導者マーティン・ルーサー・キング牧師は、トムの精神を徹底的に改革運動の戦術面に利用した。キング牧師の運動は、白人の善意を信じてあくまで非暴力で耐え続け、ついに公民権を勝ち取った。だが、1964年、キング牧師が

ノーベル平和賞を受賞したその年、一向に抜け出せない貧困への怒りが直接の要因となって、各地で黒人暴動が発生した。キング牧師に対立するオピニオン・リーダーとして台頭してきていたマルコム・Xは熱弁をふるった。若者の心をつかんで、暗に、あるいは大っぴらにキング牧師を批判した。

私は、私のことを憎んでいる人間に、「オレを愛せ」などと命令させるつもりはない。…諸君が奴らを愛することがあるとしたら、それは奴らの中から我々を真に愛するものが出てきたときだ。（「ミシシッピーの若者へ」『マルコムX・スピークス』ジョージ・ブレイトマン著 長田衛訳 第三書館 161頁）

また、奴隷制時代のハウス・ニグロと、フィールド・ニグロに言及し、屋敷が火事になれば主人以上に心配して火を消そうと必死になる前者と、強風が吹けばいいと願う後者について触れ、以下のようにいっている。

昔の奴隷主がフィールド・ニグロを抑えつけるために、トム、すなわちハウス・ニグロを利用したように、今日のあなた方や私を抑え、支配するために、われわれを受け身に、穏健に、非暴力にしておくために、現代のアンクル・トムを使っている。あなた方に非暴力を押しつけているのはこのトムなのだ。（「下層黒人大衆へのメッセージ」（同18頁）

過激な言葉でマルコム・Xは、真の自由と平等を求める黒人たちに、「欲しいものを手に入れるには、アンクル・トムに留まるな」と説いた。キング牧師のやり方は、「どんな苦しみを押しつけられても仕返しもせずじっと辛抱するだけの、信頼できる尊敬すべき黒人だと白人に思われたい一心で絶えずびくびくしている、意気地無し」と映ったのだ。それがマルコムが下した、我々がアンクル・トムの評価だった。

黒人作家ジェイムズ・ボールドウィンは、この作品を、独善的で道徳的で、感傷的な「できの悪い小説である」とまでいい切った。「万人の抗議小説」というエッセイ（黒人文学全集第11巻 早川書房）で、『アングル・トムの小屋』を抗議小説の礎石と捉え、徹底的に批判している。エヴァの父親で、心優しい農園主、セント・クレアと北部から来たその従姉（著者を代弁する北部の敬虔なキリスト教徒）の真摯な議論を取り上げ、二人がしているのは、「型にはまった論ずる余地のない叫びで、非の打ち所のない啓発的な処世訓」だが、二人とも対話のよって来る中世の道徳について何ら疑問に思っていない。「黒人か白人か」、來世は、「天国か地獄の業火か」二者択一を迫る。黒は悪で、白は栄光なのである。彼女は、「なにが結局彼女の登場人物たちをこのような行為に駆り立てたのであるか、という（唯一の重要な）問題にもあえて頼かぶりして顧みもしなかった」と非難している。ストウ夫人の作中人物の類型化にも怒っている。トムが「真っ黒で、縮れ毛の黒人であるがゆえに、謙譲と不断の肉体の難行苦行によってのみ神あるいは人間との交わりに加わることができる」という箇所など、確かにボールドウィンの抗議は当たっていると思う。共に殉教者として死んでいったエヴァとトムを比べてみれば歴然としている。だが、それは黒人が奴隷から解放されて、人間として復権していく課程での抗議であって、この小説が、いくら感傷的だといわれても、あの時代の人々の心を溶かすには十分価値があり、必要だったのだという評価は変わらない。ちょうど、いくら生ぬるいと非難されようが、キング牧師のあの非暴力の抗議が、解放から100年後に、やっと真の平等に向けての憲法改正に国家を動かし始めたように。

だが、この小説には、その功績をどんなに過大評価しても、黒人たちが永遠にその作者を許せない決定的な要素があった。物語の処々ににおわせてはあったが、結末近くで、ストウ夫人の説くキリスト教的愛が黒人に要求するものがなんだったのかが露呈したのだ。当時の社会情勢からして、それが良識ある人々の「黒人問題」を解決する最良の策だったのだろうか

ら、一人ストウ夫人を責められないが。

ストウ夫人は、イライザの夫で、やはりカナダに逃亡した混血黒人のジョージをフランスで勉強させた後、妻と息子を伴って、アフリカのリベリアに行かせている。43章の後半を使って、ジョージが友人に宛てた手紙の形式で、著者自身のヴィジョンが語られている。ジョージは「アメリカ人として見なされたくない」、ジョージが焦がれているのは、「アフリカ人としての国籍であり」、アメリカという国に当然住む権利はあっても、「自分はそれを望んではいない」、と手紙の文中でいわせている。だから、ジョージは「自分の国へ、自分の選んだ輝かしい国アフリカへ行く」というのだ。

1822年には、すでにアメリカがアフリカの西海岸に「建国」したりベリアへの自由黒人の「入植」が始まっていた。アメリカ植民協会は1816年、長老派の牧師ロバート・フィンリーが下院で提唱して結成され、翌17年に創立した。その政策は、黒人をアメリカから「追放」することだった。第5代大統領のジェイムズ・モンローの名前を取って首都をモンロビアとし、1847年には、リベリアは共和国として独立していた。奴隷解放宣言をするとき、リンカーンの頭にも、解放された黒人をここに「入植」させる考えがあった。

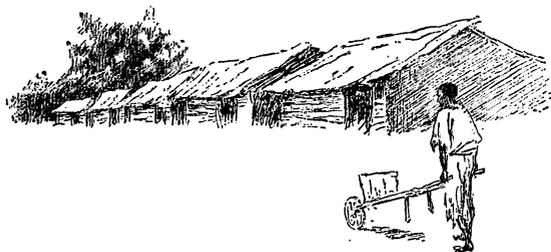
小林憲二氏は『アンクル・トムの小屋』の後書きで、ストウ夫人が影響を受けた1840年代のキリスト教人道主義の立場は、この20年代のものとは微妙に違っていると主張している（558頁）。黒人は白人より愛情深く、寛大である。黒人なら、比較的容易に理想的なキリスト者の国家を建設できるだろう。著者は、リベリアにこの国から率先して移住した黒人たちの働きでアフリカに文明とキリスト教を広めることを理想としていたのだ、と解説している。確かにストウ夫人は、作品中で、解放された黒人を蒙昧のままリベリアに送るのではなく、まず北部の教会で教化するの望ましいと述べている。

ストウ夫人の意図が微妙に違っているのはわかる。とはいえ、黒人にとってはどちらも自分の生まれた国から「追放」されるということに他なら

なかった。黒人解放の父フレデリック・ダグラスは、最初期の読者の一人だったが、断固として異議を唱えた。1853年ストウ夫人に宛てた公開書簡で、黒人もこの国土に権利を持っている。なぜ肌の色が黒いというだけで生まれたこの国からアフリカに移住しなければならないのか、と詰問している。それに対してストウ夫人は、「全世界奴隷制反対協会」の会合（1853年5月）で、もし再び『アングル・トムの小屋』を書くようなことがあれば、もうジョージをリベリアに送るようなことはしないでだろうという意志を伝えたという。しかし、それは後の祭りだろう。白人読者の頭にはすでにこの「名案」が再認識され、夫人の意図を短絡的にとらえた黒人たちは、夫人に「偽善者」のレッテルを貼ってしまったからである。

しかし、再び翻って大きな歴史の流れの中で考えると、ストウ夫人の筆^{ハート}に心を動かされ、奴隷制廃止に傾いた人々の心^{マインド}に最後まで執拗に残っていた一抹の不安を取り除き、彼らの心^{マインド}の秤の揺れを止めたのは、「黒人にはリベリア移住という道がある」というこの「分銅」だったかも知れない。

さて、そういう社会的な問題——奴隷解放後の黒人のアフリカ移住説の是非——やキリスト教の寓意等を抜きにして、日本人としての私たちにとっての『アングル・トムの小屋』は、やはり感動の名作である。特殊な状況下だとはいえ、善も悪も併せ持った我々人間が、人間の善も悪も徹底して描いたストウ夫人のリアルな描写に、喜怒哀楽の心をふるわせながら、自分ならこういう場合どう行動するだろうと絶えず考えながら読み進むことのできる本である。



(挿絵は角川文庫版より)